



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

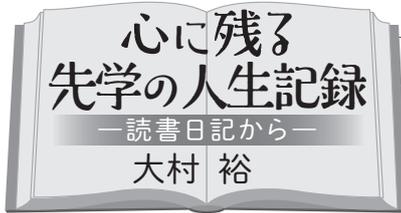
アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.207

2020.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第19回

直良三樹子『見果てぬ夢「明石原人」—考古学者直良信夫の生涯』

(時事通信社 1995年)に描かれた直良音

「明石原人」の発見者として知られる偉大な動物考古学者・直良信夫(1902~1985)の息女による父の伝記である。この本の特徴は、父・信夫の生涯を中心に描かれてはいるが、その実、「常に縁の下の力持ちであり続けた母への、レクイエムである」ということである。

直良音と信夫(旧姓・村本)の出会いは実にドラマチックである。音は奈良女子高等師範学校を出た才媛。生家は島根県の裕福な商家であった。信夫と出会った頃は、大分県臼杵町所在の高等女学校教師であった。一方、信夫は彼女より11歳も年下で、極貧の家の生まれ。当時彼は、東京の高等小学校は出たものの定職を持たず、母親の畑仕事の手伝いをしながら鬱々とした日々を送っていたのである。若くて美しく、しかも女子の最高学府を出た音は、町中の若い衆や勤務校の女子生徒たちのあこがれの的であった。その音が銭湯に行く途中に、よく見かける信夫に関心を懐いたのであった。もちろん男性としてではなく向学心に燃えた感心な少年として、である。何しろ信夫はまだわずか14歳の子どもであった。信夫は畑仕事の合間、天気の良い日は戸外に出て、「早稲田中学講義録」を一心に読みふけていたという。音は向学心に燃える信夫のひたむきさに心を打たれ、思わず励ましの言葉をかける。「いつも感心です。しっかり勉強して偉い人になりなさい」。勉強することに全く理解のない環境の中にあつて、音先生の励ましの言葉は、信夫少年を奮い立たせたことであろう。それからは道端でお互いに頻りに声を掛け合うようになったらしい。ほどなくして信夫は、独学に限界を感じ、とにかく学校に上がって本格的な勉学をするために再度上京を決意する。この時点で音先生と信夫との直接的な交流は絶たれるのであるが、その後も簡単な手紙のやりとりはしていたという。この細い糸が、後年二人を結びつけることになるのである。

信夫は上京して昼間は鉄道関係の事務所で働き、夜は岩倉鉄道学校工業化学科で学ぶことになる。猛烈な学習の結果、卒業時の総平均点は実に98点であった。成績優秀の故を以て農商務省臨時空素研究所の所員に採用され、3年間をここで過ごす。周りは帝大卒のエリートばかり。元々内向的な性格に、コンプレックスも手伝って、孤立した存在となつて行った。信夫は孤独を癒すために、かねてより関心を持っていた先史時代の研究に没頭するようになる。職場周辺の貝塚を巡り、そこから採集した土器の化学分析をした結果を学術誌に報告し、学界の注目を集めたのであった。土器胎土の化学分析の嚆矢である。しかし無理が祟ってか、やがて肺を病み、空気のない田舎での転地療養を医師から勧められる。やむなく研究所を退職。故郷に帰って療養をすることとなり、汽車で大分に向かうことになるのであるが、神戸を過ぎた頃、ふと直良音先生が姫路に居住していることを思い出す。先生からもらった絵葉書で、現在兵庫県立姫路高等女学校で教鞭をとっていることを知っていたのである。

なつかしさのあまり、姫路で途中下車して、絵葉書に書いてある住所をたよりに先生の家にとり着く。先生は成人して立派になった信夫(当時21歳)と再会して茫然と立ち尽くすが、やがて懐かしそうな笑顔で家に招き入れてくれたのであった。先生の心づくしの手料理を頂きながら、信夫はこの数年間の自分のことを懸命に話したであろう。先生は期待通りの信夫の精進ぶり、その成果の数々を聞いて、心から嬉しかったことと思われる。信夫は勧められるままに一晚先生の家に泊まる。さて翌朝大分に向かおうとすると、先生から思わぬ提案を受けたのであった。「もし急いで臼杵に帰る必要がなかったら、当分ここにおいて、静養したらいかが? そうしてくださると私も助かるのですけど」。本書に掲げられた結婚間もない音先生の写真を見ると、どこか愁いを漂わせた表情が印象的である。信夫と再会した当時の苦悩が、完全には癒されていないようである。その苦悩の詳細はここでは触れない。とにかく、実家の窮状(店が倒産)に乗じて音先生につきまとう、卑劣な男(妻子あり)を遠ざけるために、「用心棒」になって欲しい、ということだったのである。義憤にかられた信夫は、この要請を承諾する。しかし、音先生の打ち明け話を聞いた直後、関東大震災が発生する。信夫は、東京の治安がある程度回復すると直ちに上京し、行方不明となっている婚約者の女性を必至に探すが見つからず、とうとう諦めて音先生の元に帰ることになる。悄然として戻ってきた信夫を、音先生は温かく迎え入れ、献身的に信夫の療養に尽くす。結核の治療には安静と栄養が一番ということで、せっせとおいしい料理を信夫のためにこさえるのであった。こうした日々を過ごす中で、二人はやがて自然に結ばれる。信夫23歳、音は34歳の時であった。ちなみに、信夫は音の家に入籍し、「直良」を名乗ることになる。

音は信夫の研究や健康のことを常に最優先に考えて行動をしていた。信夫の研究上の希望を容れて勤務校を変えたこともあった。娘の三樹子は、「母は父の学問のためなら、たとえ三か月分の給料がとんでしまっても、黙ってお金を用意したことだろう」と書いている。夫が理不尽な要求を突き付けても、音は黙って耐えていたというが、これは11歳も年上ゆえの心のゆとりであったろうか。音は、仕事では家庭科だけではなく、数学も担当している。趣味の日本画も玄人はだしで、「菱江」という雅号を持っていた。それは、何と昭憲皇太后から賜ったものだという。何から何まで一流の女性であった。1960年、信夫は『日本古代農業発達史』によって早稲田大学から「文学博士」の学位を受ける。長い苦労の果てに体調を崩して病床にあつた音に、学位取得の報せを信夫が伝えると、彼女は「目頭がうるんでくるのを、こらえようがなかった」と三樹子は書いている。家計と家事を支え、夫の学問の大成を願ってきた音の喜びは、いかばかりであったか。世に出ることもなく、73歳で静かに生涯を終えた音の「勲章」は、もしかすると「文学博士直良信夫」であったのかも知れない。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録—読書日記から—(第19回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第200回) 南 勇輔 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました(第16回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「海上世界のコスモロジー 大寺山洞穴の舟葬墓」 忍澤成視 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第16回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

16.1 北米考古学の動向:ニューアーケオロジーについて

北海道から九州までを前期旧石器関係の資料収集の目的で駆け巡った1974年の秋はルイス・ビンフォードの「人類学としての考古学」(Archaeology as Anthropology, 1962)で始まったニューアーケオロジーの余波が続いていて、行く先々でいわゆるプロセス学派の論旨、現状が話題になった。その数年前に、「1971年の動向」を集録した『考古学ジャーナル』第68号に「欧米の動向」として、ニューアーケオロジーの主張者たちの標榜する考古学の目的と方法、その現状などに焦点をあてた短文を発表していたからかもしれない。京都大学をおたずねしたときは、当時京大の助手をしてもらった都出比呂志氏とロングエーカー(William A. Longacre)やヒル(James N. Hill)などが合衆国西南地方の考古学遺物から親族組織を復元をした論文の問題点などについてお話したことをおぼえている。丹生遺物を見せていただくために平安博物館にうかがったときも、角田文衛先生からニューアーケオロジーについて講演をしてほしいといったお話があったけれども、時間の都合がつかず、実際に講演したのは11月半ばにしばらく滞在した仙台で東北大学の学生を対象に話したのにとどまった。芹沢先生のご指示で、近東での新石器時代の始まりについて当年夏のガンジダレ遺跡での発掘経験など組み込んでお話しする計画だったけれども、北米の考古学者たちの研究動向として、新石器時代の始まりについても、それがいつ、どこで始まったかだけでなく、なぜ、どのようにして進化したかを探求すべきだという主張に言及することになった。これについて松井章さんが大いに同感されたとのことは前号に触れた。松井さんはその後まもなく1977年にネブラスカ大学に留学されて、ピーター・ブリード教授らのご指導で環境考古学を研修された。同じく東北大学出身で現在同大学教授の阿子島香氏はニュー・メキシコ大学の大学院でニューアーケオロジーの大御所のルイス・ビンフォードに師事され、博士号を授与されている。この2年後に麻生優・加藤晋平・藤本強諸氏共編で雄山閣から出版された『日本の旧石器文化』の第5巻(1976)に「旧石器文化研究の方法論—特にプロセス学派の観点を中心として—」と題して、北米での考古学議論をややまとまとめたかたちで紹介させていただいているがこれに関する共編者の方々のご相談もこのころに始まったのだと思う。

16.2 井川定慶喜寿記念会

資料収集旅行に出かけた1974年の秋には、たまたま私の父、井川定慶の喜寿記念祝賀会が計画されていたので、旧石器の勉強から一日割愛してこれに参加した。大阪府羽衣町のホテルで開催された祝賀会の焦点は喜寿記念会出版の『日本文化と浄土教論攷』。知人・同僚・先輩・後輩の方々から寄せられた論文やエッセイ230点、998頁に加えて、定慶自身の短文・論評21点を再録、全部で1341頁に上る大巻だった。父は『法然上人絵伝の研究』で京都大学から旧制の博士号を授与された仏教史学者なので、寄稿論攷のほとんどは仏教関係の内容だが、それでも、檀原考古学研究所初代所長の末永雅雄博士、思想史学者の石田一良博士、関西大学の網干善教博士など、考古に関係のあるお名前もちらちらみあたるいっぽう、石田茂作、堂本印象などといった方からも随想文をいただいている。私も仲間に入れていただいて「日本文化の源流と旧石器文化の研究」という小文を提供した。父は3年後に79歳で他界したので、1974年の喜寿記念会に参列できたのは幸いだった。

16.3 カナダと日本考古学研究

1974年の年末に帰宅して、家族とクリスマス、お正月を祝うと

まもなく、1975年の1月18-20日に開催されるシンポジウムに参加するためオンタリオ州ピーターボロー市にあるトレント大学(Trent University、トロント市所在のUniversity of Torontoとは別の大学)にむかった。トレント大学内に設置される新施設を記念する目的で計画された一連の講演会が、担当者のモーガン・タンプリン助教授のご努力で大変立派なシンポジウムとなった。発表論文は、アジア・パースペクティブス誌の日本考古学特集号として(Asian Perspectives, 19巻1号, 1978)出版されている。まず芹沢長介先生の「日本の石器時代」と題する総観に続いて、私が旧石器時代を概説し、それに対するウィリアム・アービング(William N. Irving)のコメントがあった。次いでリチャード・モラン(Richard E. Morlan)の楔形石核による細石器技法、ピーター・ブリード(Peter Bleed)の縄文技術文化の伝統と題する論考のあと、北海道でのフィールドワークから戻ったばかりのウィリアム・ハーリー(William M. Hurley)、ギャリー・クローフォード(Gary W. Crawford)等のチームによる渡島半島のハマナスノ遺跡を中心とした研究の当時点における結果の詳しい報告があった。そのあとは弥生文化についてパトリア・ヒッチンス(Patricia Hitchins)の発表、朝鮮半島との関係についてL・サンプル(L. L. Sample)の考察に続いて中国も含めた東シナ海をめぐる沿岸文化圏についてリチャード・ピアソン(Richard Pearson)が展望した。

“国際的”ともいえる規模のシンポジウムだが、発表者の所属機関をみると、芹沢長介、ピーター・ブリード両先生と当時ノース・カロライナ大学の大学院生だったクローフォード以外はすべてカナダの研究機関に属している。私がモントリオール市のマギル大学、アービング、ハーリー、サンプルはトロント大学、モランはオタワの国立博物館、ピアソンとヒッチンスはバンクーバー市にあるブリティッシュコロンビア大学所属だった。それは旅費などの費用を節約するために近隣の研究者を意識的に選んだのではなくて当時北アメリカで日本考古学を専攻して考古学者のほとんどがカナダに集中していたからだった。それは北米より視野を広げて世界の英語圏での日本考古学研究についてみても同様だった。この異常ともいえるカナダ集中状態がその後何年か続いていたが、2000年代になって様相が変わりはじめた。ピアソンが2000年にUBCを引退、まもなく私も2003年にマギル大学から引退したのに加えて、国立博物館のモランが2007年になくなった。日本の考古学に関する研究活動と次の世代の研究者養成が継続していたのは、トロント大学。ノース・カロライナ大学で環境考古学を研修されたクローフォード博士が、出身地のトロントにもどられて、日本ばかりでなく、東アジア一帯の先史時代人の植物利用に関する研究を勢力的に遂行されて興味深い結果を得られていたが、同氏も2020年6月末で引退されたときいている。カナダでの日本考古学に関する景観は更にさびしくなることになるが、それはまださきのこと。私が忙しく駆け回った1974-75年度から20世紀の終わりころまでは、世界の英語圏での日本考古学研究に関してカナダが卓越した地位を占めていたことを記録しておきたい。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学部(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ロードクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在:ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ロードクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員:2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

U レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 200

与論城跡 ～鹿児島県与論町

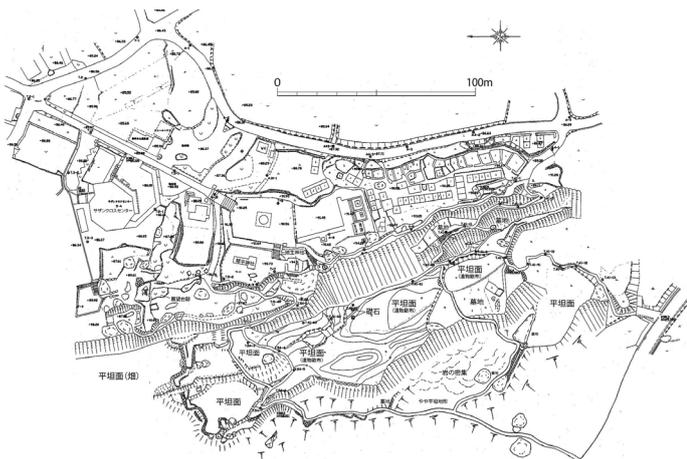
南 勇輔

鹿児島県の与論島と聞くと、百合が浜に代表される海の綺麗な鹿児島県最南端(沖縄県と間違われることも)の離島というイメージの方が多いのではないだろうか。もし、与論島に來られたことがある方なら、海だけではなく、島の高台にある琴平神社、地主神社や隣接するサザンクロスセンター(与論町の観光ガイド施設)から望む、沖縄島や伊平屋島、伊是名島の眺望を記憶に留めた方も多いと思われる。しかし、この琴平神社がある場所こそ今回私が紹介させていただく与論城跡(与論グスク)である。



▲サザンクロスセンターより眺める与論城跡

与論城跡は、築城主として琉球北山王の三男とされる王舅^{おつしやん}や琉球中山王尚真王^{はなぐすくまさぶろう}との関わりが伝わる花城真三郎が由緒、家譜として伝わっており、現在は与論町誌で採用されている王舅説が用いられる傾向にあるが、いずれにせよ沖縄島の勢力が築城に関与したとが伺われる城跡である。



▲与論城跡の縄張り図(山本2014より引用)

当城跡は、これまで沖縄県と鹿児島県の間に位置する奄美群島内でも、グスクの特徴を持つ城郭遺跡として評価がされており、平成5年度には与論町教育委員会が主体となって発掘調査が実施され、調査成果の概要が鹿児島県考古に報告されている。しかし、平成5年度の調査以降は、外部の研究者によって縄張りの検討と表採品の報告が行われたのみで、行政による確認調査等は実施されておらず、その一方で城内の観光地整備事業によって公園

整備が進み、現在の改変が進んだ状況となった。しかし、2010年代になると赤司義彦・山本正昭らの調査により従来注目されていなかった崖下の縄張り調査が行われた結果、崖下に石垣が残存していることが判明したことにより、最大4万㎡近くに達する琉球列島のグスクの中でも有数の規模であるとともに、琉球王国の中心地であった沖縄島の周辺離島の中では最大規模の城郭遺跡であることが判明した。

また、令和元年度に沖縄県立博物館・美術館の企画展「グスク・ぐすく・城 一動乱の時代に生み出された遺産」において、当遺跡の想定復元模型が作成され展示されたことによって、一般の方々にも俄かに周知度が高まってきている状況にある。

筆者が在職する与論町においても、近年明らかになってきた与論城跡の学術的価値の高さを踏まえ、国指定を目指した調査を令和元年度から実施しているところであり、現在、調査に関わっている遺跡でもある。

さて、与論城跡の特徴について述べてきたが、実際のところ近現代の寺社地や公園としての整備やそれ以前に畑地として利用されていたため、城の縄張りについては特に台地部の外郭が不確定な状況であり、特に、大手口や搦手口の位置や各曲輪の関係については判然としない状況にある。また、現地を踏査するにあたって崖下の曲輪は多くが藪に覆われているため(最近では伐採作業により少し改善している)、草木を薙ぎ払いながらの調査となる。ちなみに、与論島には毒蛇のハブが生息してないため、藪にも入って行けるのがせめても救いである。

このような与論城跡であるが、町民の方々にとって当遺跡は墓地や神社としてのイメージが強く、城跡としての知名度は低い状況にある。こういった中で与論城跡の調査を進めて行く中、決して多くはないが何人かの方々に与論城跡や島の歴史そのものに関心を持って頂くことができた。遺跡の調査を行うことで、地域の方々に島の歴史、そして文化財について関心を持ってもらうきっかけを感じた瞬間であり、このことから与論城跡は私にとって地域で文化財に関わる仕事に取り組むことについて考えるきっかけになった重要な遺跡でもある。

与論城跡の調査は始まったばかりであり、課題は山積みの状況である。最初に述べたように、眺望の良さから本町の中でも有数の観光スポットになっているが、決して城郭遺跡としての認識は高くない。今後は、城郭遺跡としての認識をもってもらえるように、調査の実施やその成果の普及啓発活動を行い、与論城跡の魅力を発信していきたいと思う。そして、地域の方々にとって大切な遺跡、文化財として後世まで引き継がれていけるような遺跡を目指したい。

参考文献:

- 沖縄県立博物館・美術館編2019「グスク・ぐすく・城:琉球王国のグスク及び関連遺産群世界遺産登録20周年記念特別展」沖縄県立博物館・美術館
- 増尾国忠1963「与論島郷土史」与論町教育委員会
- 三木 靖1983「(3)沖永良部島の山城」『薩琉文化』第20号、南日本文化研究所
- 与論町誌編集委員会1988「与論町誌」与論町教育委員会
- 山本正昭2015「与論グスク概観」『しまてい』No.73、建築情報誌しまてい編集委員会

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは喜友名正弥さんです。

考 古学者の書棚

「海上世界のコスモロジー 大寺山洞穴の舟葬墓」シリーズ遺跡を学ぶ142

岡本東三／新泉社(2020)

忍澤 成視

1 海進と地殻変動の証拠が残る海食洞穴遺跡

海食洞穴は、海岸部断崖地層の軟質部が長期間の波浪で浸食し形成される。縄文時代早期末から前期をピークとする縄文海進。そして元禄地震(1703年)、関東大震災(1923年)など房総沖を震源とする大地震とこれに伴う地盤の隆起・沈降の痕跡は、房総半島南端の海岸部の地層中に見られ、併せて海食洞穴遺跡の主な形成時期とその標高や位置関係进行调查することで、当時の海水面位置や隆起の規模などを知ることができる。

2 房総半島の海蝕洞穴遺跡

房総半島の海食洞穴遺跡は、内房域の富津岬より南に位置する城山洞穴・明鐘崎洞穴・大黒山洞穴、外房域勝浦周辺の本寿寺洞穴・荒熊洞穴・こもり穴洞穴、そして南房総館山湾周辺の鉦切洞穴・大寺山洞穴・安房神社洞穴・佐野洞穴・出野尾洞穴など広域に分布する。これらは海進の経過で形成時期の異なる海食洞穴内に形成されているが、洞穴の使用開始は概ね縄文前期から晩期まで、さらに弥生時代・古墳時代へと続いている。ただし、三浦半島の海食洞穴遺跡が主に弥生時代を主とするのに対し、房総半島のそれは縄文時代を主とするという違いがある。

3 縄文の漁労民と多様な骨角器

館山市の館山湾に面した標高30~40mの高台に位置する鉦切洞窟と大寺山洞穴第3洞。これらの洞穴内包含層からは、スガイ・イシダタミ・サザエ、チョウセンハマグリ・マガキ・アサリなど岩礁や砂浜に生息する巻貝・二枚貝、ブリ・サバ・アジ・マイワシ・マダイ・ボラ・ヒラメ、そしてイルカなど湾内や外洋を回遊する魚類や鯨類の骨、さらにヤス・銛・釣針など東京湾を挟んで対岸に位置する三浦半島の遺跡群出土のものに共通する漁具が多量に見つかった。これらは、縄文時代後期初頭から後期後葉まで、当時付近海域で漁労に依存した海人集団の生活痕跡である。

4 海食洞穴にみる縄文時代の死生観

大寺山洞穴第3洞からは、開口部に7体の人骨が見つかった。縄文時代中期後半から後期中葉のもので、人骨の形質は、低顔・広顔・短頭、推定身長155cm程度、外耳洞外骨腫も認められ、潜水漁を伴う海人の姿を示すものだった。これらの人骨は、煮炊き用土器や漁労用の骨角器とともに発見されており、洞穴内の狭い生活空間を有効に確保するため、洞穴の奥壁に無造作に押し込まれるようにしてあった。これは、生者と死者の空間が未分化であることを意味するとともに、死者・祖先とともに生きる縄文人の死生観を示すものといえる。

5 房総初のト骨とト庭遺構の発見

房総半島の南東岸、勝浦市守谷湾東側の標高7.5mに位置するこもり穴洞穴から、弥生時代末から古墳時代前期に属する約40点のト骨が見つかった。シカ・イノシシの肩甲骨や寛骨、肋骨などを使ったもので、当該資料の出土は、東京湾対岸の三浦半島には多いが、房総半島では初めてのことである。

また、これらを使った占いが行われる際、その場にアワビの貝殻を敷き詰めた跡が見つかるなど、ト庭遺構の発見は全国的にみても珍しい。

6 古墳時代の舟葬墓と海上世界

大寺山洞穴第1洞からは、12基以上の丸木舟を棺に用いた「舟棺」が発見された。これらは、洞穴南側壁に沿って重なるように安置され、舳先はいずれも洞穴開口部すなわち海に向けて置かれていた。棺は洞穴の床面に直置きされ、その周囲や底を角礫や木炭、粘土で固定していた。舟棺の大きさは約3m、本来の丸木舟を二つに裁断し、舳先部を棺の身に、船尾部を蓋にしたものとみられる。

出土した舟棺の木材は全てスギだった。これは、日本書記にある、浮宝(舟)はスギ・クスノキ、宮殿にはヒノキ、棺にはマキを用いる、という記載に合致する。大寺山洞穴から出土したこの舟棺や木製品は良好な状態で遺存していたが、これは洞穴内が安定した温湿度を保ち、砂質土壌で乾燥していたため、ちょうど砂漠内の遺跡に似た状況だったからとみられる。

世界各地の海洋民族の多くは、独特の海上世界観をもっている。これらを表象するのが、水平線の彼方の「あの世」に遺体を運ぶ舟であり、舟葬という葬送儀礼を伴っている。そしてその先導役として登場するのが太陽や鳥である。日本でも、しばしばこれらに伴い海鳥の骨が出土するのは、このことと無関係ではあるまい。

7 華麗な副葬品と海人族の首長墓

副葬品には、土師器・須恵器、甲冑・大刀・剣・刀子・斧などの鉄製品、管玉・勾玉・ガラス玉・耳環などの装身具、漆塗盾・漆塗弓などの木製品、直弧文をもつ鹿角製刀装具、歩揺付き金銅製品・銅製鈴など希少なものも多く、いずれも東国の大型前方後円墳から出土する副葬品と比べても遜色ない代物である。

海食崖が迫り平野部が少ない房総半島南端の安房では、地方豪族たちはその生産基盤を農耕に求めることが難しい。眼前に広がる海が生産基盤になるのは必然であり、そこには海人族独自の世界が展開していた。古来から、海人は漁労と航海を生業にした海辺の民であり、これを糧に地域で支配力をもった者たちが、やがて大和政権との交渉によりさらにその力を強めていった。そして、海を身近に生きる人びとにとって、海上世界という独特のコスモロジーが生み出されたのである。



アルカ通信 No.207

発行日 2020年12月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp